



# 70 colors of Sapporo's landscape for large-scale architecture

## 札幌の景観色70色

### 大規模建築物等 色彩景観ガイドライン

#### 基本的な考え方

- 1 景観をつくるもの p.1
- 2 環境デザインと配色 p.1
- 3 カラーポキャブラーの成立 p.2

#### 景観色の抽出

- 4 ガイドライン策定調査・研究概要 p.3

#### 使い方

- 5 ガイドラインの運用にあたって p.5
- 6 70色・使用上の解説 p.7

#### カラーエッセンス70 -配色票-

p.8

このガイドラインは、【大規模建築物等景観形成指針】のうちの色彩計画について一定の考え方をまとめ、調査研究成果を基に具体的な色彩提案をしています。このガイドラインの趣旨をご理解いただき、四季折々に変化する個性豊かな美しい札幌の景観づくりに役立てていただきますようご協力をお願いいたします。

札幌市企画調整局計画部都市計画課都市景観担当

研究・協力：札幌市立高等専門学校 教授 宮内博実

# 基本的な考え方

## 1 景観をつくるもの

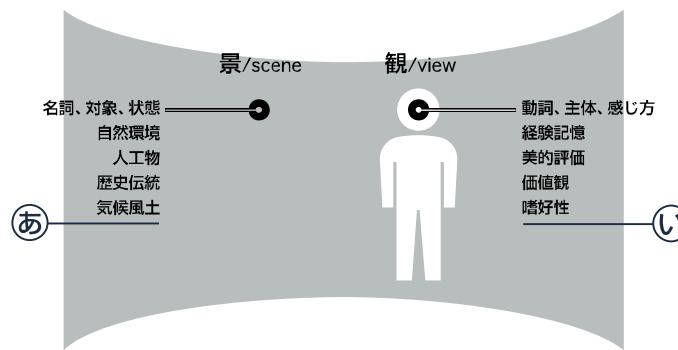


図1：景観の成立・構成要素

「景観」を考えるにあたって、まず言葉の上から探ってみましょう。この漢字二文字の「景」をscene、「観」をviewと英語に置き換えるとわかりやすくなります。

「景」は観る「対象や状態」を表しており、気候や植生などの自然環境や人工の建物、道路など周りにあるものすべて、さらにはそこで営まれる様々な活動などが含まれます。一方「観」は観る人自身の「感じ方」を示しており、そこに住む市民や街を訪れる人たち全てが体験している、観ること感じることそのものといえます。

このように「景観」とは、「どのような対象物」を「どのように観るか」という二つの概念が対になって成立しているものと考えられます。それは、決して特別なことではなく、そこに住む人にとって極めて自然な毎日の暮らしのものであり、また訪れる人にとっては、その街の歴史や文化などを理解し判断するための大きな要素となっています。

札幌の景観はどうあるべきか、あまり大袈裟に考えてしまうと議論だけで現実的に進まなくなってしまいます。できることから、コストをあまりかけずに景観をほんの少し意識しましょう。中でも第一印象の大きな部分を占める「色」に対してこれまで以上に気を配ることで、誰もが美しく感じられる都市景観が形成され、より豊かな都市環境がつくられます。

## 2

### 環境デザインと配色——(あ)の成立

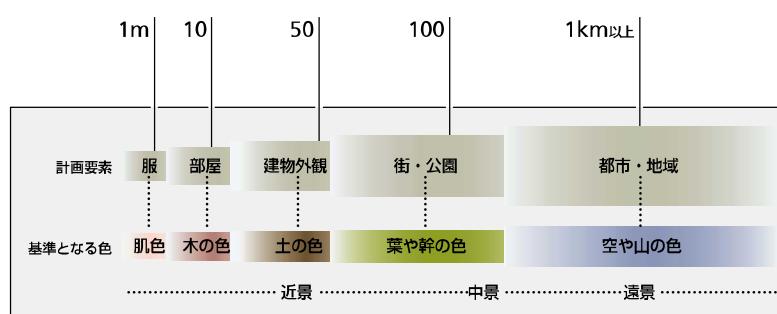


図2：色彩計画における配色基準

#### a. 色彩計画における配色基準

配色を考える時の基準は、人を中心に組み合わされるものとの距離によって変わります。

私たちは、同時にいくつかの色を眺めて全体の配色バランスを考えることを習慣的に行っています。

図2のように、最初は身に着ける（身体）範囲の1mは肌の色が基準となり、次に数歩歩く10mの範囲、これは建物の内部空間であり、素材としては木（木目）の色が基準として重要です。50mになるとインテリアからエクステリアへ広がり、建物などの外観が周辺の土や石などの自然素材色と、どのように対比して見えるかが基準となります。さらに100m以上離れると植物の葉の緑、幹の色、そして空の色や背景の山の色など、中景から遠景の変化が全体の配色イメージとして馴染んで見えるかどうかが重要な判断基準となります。

遠景から中景、近景にいたる見え方は、目線の角度を変えるだけで同時に眺めることができます。普段はそれほど意識しなくても、桜の花が咲く季節や紅葉の季節や初雪の降った朝などは、誰もが景観全体を色として意識できます。色のバランスがとれていることは、環境や生活そのものをしっかりとセンスアップさせてくれます。

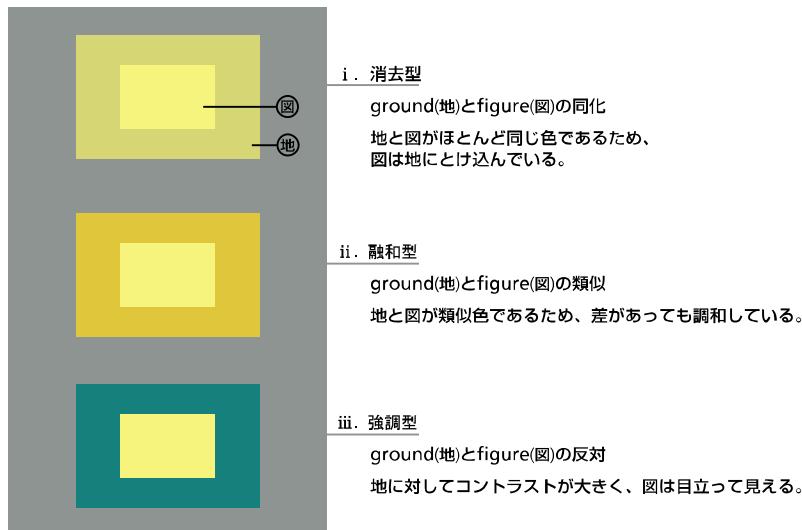


図3：景観の色彩計画の視点 [3種類の配色イメージ]

#### b. 景観の色彩計画の視点 景観に対して建物単体をどのように考えるか？—向こう三軒両隣の考え方

俗に言う「向こう三軒両隣」は、景観における意識の持ち方についての重要なキーワードになります。初めに、計画する建物の両隣を意識し、少し離れた地点から同時に眺めて全体の調和がとれるように考えます。次に、通りから向かい側の建物も同時に眺めて考えます。札幌の街並みの特徴である直交する幅広い道路（格子状街路）は、見通しがよく建物の連続性を強調しますから、両隣を越えてより広い街区のつながりを考慮する必要があります。

建物などの人工物は、目立たせるのではなく季節毎に変化する花や樹木など自然の美しさを強調させるような効果を考えるべきでしょう。

具体的な考え方としては、次の3種類の配色をイメージすると良いでしょう。  
周囲の環境を「地」、計画する建物を「図」として考えます。「地」となるものは、遠景の山や周囲の木々などの自然物もあれば、すぐ後方のより大きい建物である場合や両隣の建物の場合もあります。図3のように「地」と「図」が同じ印象になる〔消去型〕、類似色で多少違いはあっても調和して見える〔融和型〕、「図」が際だって見える〔強調型〕の3種類がありますが、季節がダイナミックに変化する札幌の自然に調和させるためには、〔消去型〕〔融和型〕になるように計画することが大切です。

#### ヒント

色相 [Hue]：その色が色環の中で赤～黄～青のどの位置にあるかを示す。  
明度 [Value]：色の明るさを示す。明度が最も高いのが白。最も低いのが黒。  
彩度 [Chroma]：色のあざやかさを示す。彩度が高ければあざやかである。

## 3

### カラー・ボキャブラリーの成立——(い)の成立

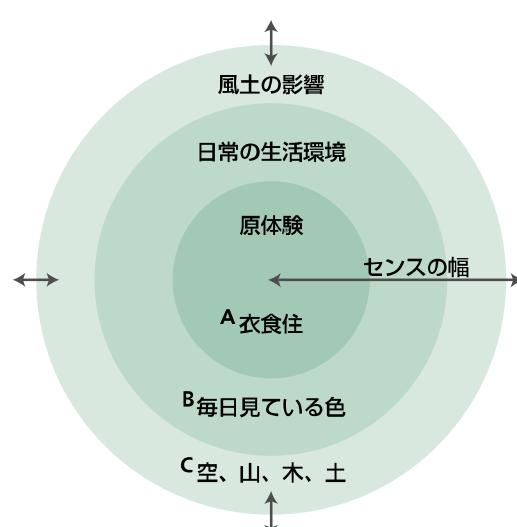


図4：嗜好傾向の成立過程

一方において、景観に対して主体である人の「感じ方」がどのようにして形成されるかを考えます。

個人的な配色の好き嫌いは、かなり早い時期に決まるようです。

親からの影響、初期段階のセンス、無意識での条件：図中A

毎日の生活環境、暮らしのセンス、現状での条件：図中B

風土地域環境、天気・気候、大きな環境条件：図中C

個々人は、この3つの条件に影響され成長とともに、徐々に自分の頭の中に配色が蓄積されていきます。

この配色の蓄積は、そのままその本人の「カラー・ボキャブラリー（配色のパターン化=配色語彙）」となり、配色を判断する際の評価基準となります。新しい配色は「好きか嫌いか」、「良いか悪いか」、「勧めるか勧めないか」の3つの判断軸によって感覚的に整理され、自分のカラー・ボキャブラリーの範疇であれば「いい色・好きな色」と判断されます。

蓄積されたカラー・ボキャブラリーの中から多くの構造物が景観として創り出され、それがさらに個人個人のカラー・ボキャブラリーを生むことになります。個人においても社会においても、これらはお互いに影響されながらお互いを生み出し、長い年月の中で繰り返されています。この繰り返しを経て洗練されることで、景観がどんどんよくなっていくか、あるいは悪くなるかが、その人・土地・国の文化のありようになります。毎日見ている景観は、そこに住む人の感性を育てるにそのまつながります。

[→p.4]

# 景観色の抽出

## 4

### ガイドライン策定調査・研究概要

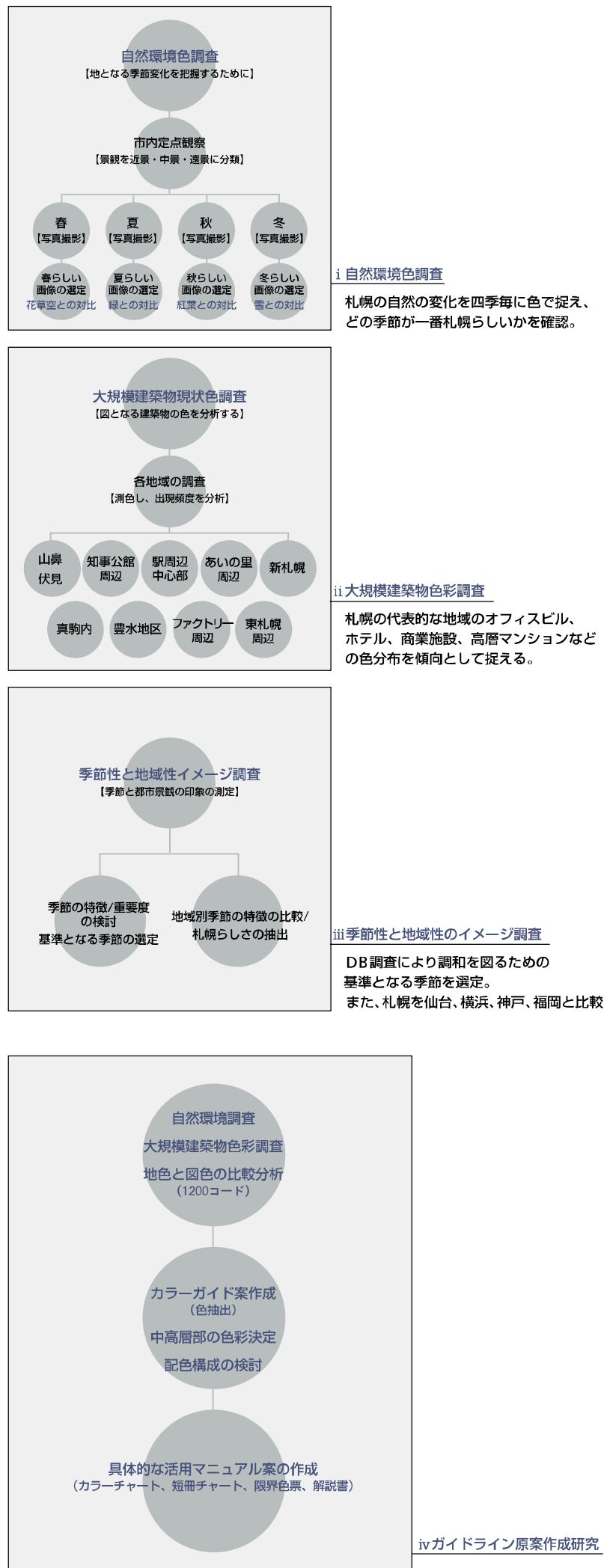


図5：調査・研究一覧

共同研究：札幌市立高等専門学校 教授吉田恵介、講師大渕一博

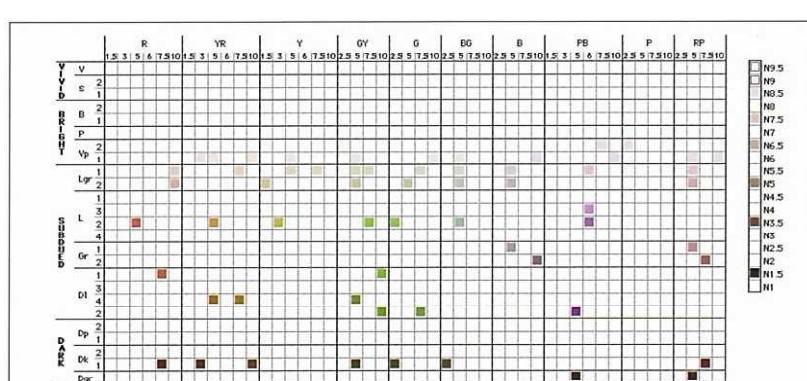


図6：[hue & tone matrix]による70色の分布図

対象物の色彩分布を瞬時に傾向値として表示するアプリケーションソフトを使い、今回設定された70色を簡単にプロットしている。これはパソコン画面上で48色相を横軸に、25トーンを縦軸とし無彩色18段階を加えて合計で1,218色のマトリックスとして構成されている。

#### a. 調査・研究概説

[色彩景観ガイドライン]の策定にあたり最初の調査研究は、季節毎に変化する自然環境を「地」色として捉えることから始まっています。次に代表的な地区における大規模建築物の外装の色を「図」色として現状を調査し、この「地と図」で構成される景観の現状を把握しています。

さらに市民を対象として札幌の景観に対するイメージ調査と各季節イメージ調査を実施、これらの分析結果から色彩の具体的提案として【札幌の景観色70色】をガイドラインとして作成しました。

##### 調査研究一覧

- ・市内全域から特定の場所を選定し、季節毎に自然環境を地色の変化として写真撮影
- ・市内9地区の大規模建築物の外装色を図色として視感測色を行って出現色を分析
- ・データベースイメージ調査手法\*による都市景観と季節的印象を測定
- ・色彩景観ガイドラインの策定=使用可能な色の範囲や配色方法を具体的に示す

なお、事前研究として景観を色彩として捉える基本的な手法開発、さらに色彩調査するためにカラーシステムの開発 [hue&tone matrix] (図6)とコンピュータ分析ソフトの開発を行っています。

\*データベースイメージ[DB]調査：言語によるイメージ表現を配色に変換して判断分析の材料とし、イメージスケールに落とし込んで傾向を読みとるもの。心理的な感性調査手法。

#### i 自然環境色調査

札幌の特徴を色で考える場合、多くの人が「白い雪」のイメージを持ちます。しかし、実際には降った雪が根雪となり景観を白が占めるのは、1年のうちの3ヶ月程度であり、激しい降雪で視界が真っ白になり白のフィルターを通して景観を見るような状況はほんの数日です。また、白はあらゆる色彩と調和する色ですが、白を基準に配色した色同士が調和するとは限りませんから、「白い雪の中で映える色」という観点から景観の色を考えるのは、実は効果的な方法ではありません。

建築物等が常に景観の中でバランスを保つためには、「地」となる自然環境を四季を通して把握する必要があります。そのためにカギとなる季節【基準季節】を選びました。北国らしい自然の特徴としては雪の他に「新芽の黄緑から萌える緑への急展開」、「たくさんの花が同時に咲く」という短期間の急速な変化があります。春から夏にかけて多くの色が一斉に街中にわき上がり広がってゆく・・・。「他にはない札幌らしい季節」とは、この季節と考えられます。すなわち、この頃のめまぐるしい自然景観を「地」に、「図」がうまくマッチングする色彩が景観色として有効な色といえるでしょう。

#### ii 大規模建築物色彩調査

市内の代表的な9地域で行った大規模建築物約300件の外装色彩調査の分布によると、色相にばらつきがあり、高彩度であることが特徴としてあげられました。このことから札幌市の建物の現状は派手な傾向があり、全体としての統一感がなく、まとまりに欠けるということになります。



#### iii 季節性と地域性のイメージ調査

景観はもともとイメージとして捉えられている側面がありますので、全体の景観色を配色構成で考えるためには、市民の皆さんを感じている都市や季節の「イメージ」を測定する必要がありました。そこで心理的な手法を使い、市民が描く札幌の地域イメージや季節イメージをわかりやすい形容詞を使ってアンケート調査[DB調査]を行いました。その結果、札幌のイメージは、「クールでナチュラル」となり、さわやかな自然を感じさせる風土を素直に表しています。これは爽快ですっきりとした北国特有の自然環境や、気候風土をそのまま印象として反映しているといえます。

#### iv ガイドライン原案作成研究

以上の研究成果を最終案としてガイドラインにまとめたため、さらに研究・検討を行いました。自然環境における季節毎に出現する色の範囲を確認し、この範囲からガイドラインとなる色を抽出したところ、札幌は緯度が高いため色温度が青みに振れており、寒色系が美しく見えること、植物や樹木など豊かな緑に合わせるには、白もしくはきわめて白に近い高明度・低彩度の色が有効であることなど、札幌の土地柄を活かす景観の色彩を考察しました。

また、大規模建築物の現状から中高層の配色について整理分析し、その有効な使用方法を探りました。これにより候補色を抽出し、その色を基点とした許容範囲を示す【限界色票】を設定、最終案として各色のマンセル値を指定、ラッカーアクセントによる基本色票を作製しました。

#### ヒント

色温度：温度が色の見え方に影響することを数値化したもの。  
色温度が高くなるにつれて光の色が赤～黄～白～青になる。  
寒色系：寒い感じを与える色。色環では緑～青紫をさす。↔暖色系  
クール系：グレーやアイボリーなどの色は微妙な色相の違いにより、クール系、ウォーム系に区別される。

#### b. 札幌の景観色70色

これまでの調査研究の結果が、ガイドラインとして選定した【札幌の景観色70色】です。

大規模建築物等の外装色として科学的な分析を加え、また、誰もが綺麗であると思えるような色彩を選定しています。これら70色のひとつひとつは、風土イメージを想像できるオリジナルの札幌らしい色名を持つていますが、これは、設計上の誘導基準だけではなく、市民の皆さんの中に働きかけ、心に留めておけるように名付けたものです。色から言葉へ、言葉から色へ。色彩の世界を楽しみ、札幌の街を色彩から考えるきっかけにしていただきたいと思います。

色彩から捉えた札幌の景観づくりには、広い大地の開放感や先進的な気質を活かしながら、豊かな自然環境を背景として人工的な構造物をバランスよく配置することが重要です。各色の特性を理解して景観づくりの道具として使っていただきたいと思います。色彩がコントロールされてくると、素材感・質感がより意識され、その大切さを考慮するようになるでしょう。また、質感がコントロールされると次は形態がより意識され、建築などのデザインにも統制がとられるようになります。

このような意識の向上と景観イメージのレベルを計画的に維持できるようになりますと、都市生活のモラルも向上し、よりよい文化や伝統を生む肥沃な土台となると考えられます。

[→カラーチャート]

[→p.2]

# 使い方

5

## ガイドラインの運用にあたって——色彩景観計画の組み立て方

### a. 地区の色を考える——周辺環境との関係

計画の周辺部を「地」、計画建物を「図」の関係で考えると、色彩景観計画は特別な事情が無い限り【消去型】か【融和型】とするべきでしょう。まず、道の反対側など計画地の両隣を見渡せるところから写真を撮り、調和する色について周辺環境とまとめて考えます。その場合、計画地が市の中心部などの建物等の密集地である場合と、郊外である場合とでは、それぞれで配慮する条件が異なります。まず中心部などでは多くの場合、周囲に大規模や中規模の建築物等が混在しています。その際、計画する建物と比べて小さな建物よりは高明度・低彩度にしましょう。暗く鮮やか(低明度・高彩度)にすると、周辺に強く圧迫感を与えます。

また、札幌の特徴である格子状街路で東西南北に道が走っている地域は、建物がどちらの方角を向いているかによって色彩への影響が大きく違います。同色を使ったとしても、南西に面する壁面では太陽光の影響で明るく見え、北東に面する壁面では影になるので暗く見えます。したがって、ウォーム系の色は南西面で美しく、クール系の色は北東面で美しく見えますから、色彩の決定にあたっては建物の方角を考慮すると良いでしょう。

郊外の場合には周辺に樹木・植栽など自然が多くなります。自然の緑に合わせる色としては白に近く、きわめて薄い色が有効に作用します。また、その土地の自然環境に見られる色(木の幹、土の色、石の色など)の類似色を選ぶことも考えられます。高明度・低彩度の色は、単体で見ても集合体として見ても綺麗に見える色であり、ディテール(細部)や仕上げ、質感を活かすことができます。

[→p.4]  
[→カラーエッセンス70]



Check Point

周辺部の色彩を把握しているか?

周辺部の色彩に対してどうあるべきか  
方針が定まっているか?

周辺部の色彩と調和がとれているか?

### b. 大規模建築物等の使用色の優先順位——カラーコンビネーションのテクニック

大規模建築物等は、物理的にも心理的にも他を圧迫しますので、色彩のコントロールは、圧迫感を軽減するための有効な手段になります。また、一般の住宅において有効な色も、大規模建築物等に使用するとそぐわないことがありますので、配色には注意が必要です。特に高層部では、高明度・低彩度の配色により圧迫感を軽減するように計画しなければなりませんが、一方で、低層部にアクセントカラーを用いることで個性を主張することができます。図7のように、3階程度の高さまでは色相に変化を与えるのも有効です。実際、部分的に色彩や素材等を大きく変えるなど、大胆な低層部ファサードのデザインの建物が多く見られます。歩道を歩く人の目線での連続性に配慮することが重要です。

付属の【カラーチャート】には、使用面積のめやす(1つの視点から眺める範囲内での)を数値化(図8)していますので、配色の参考にしてください。また、単色の場合は、A~Cを使用めやすとしてください。色によっては縦方向の配色が効果的なものがありますので、それぞれの特性について【カラーエッセンス70】の解説をご覧ください。

[→カラーエッセンス70]

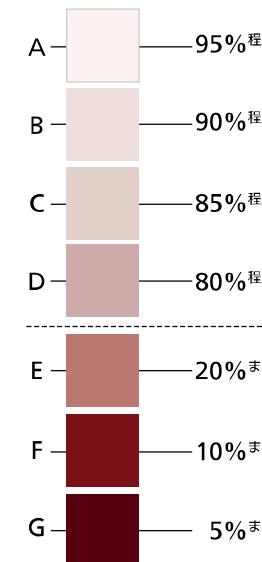


図8: 各色の全体に対する使用面積のめやす(タテ第1列の場合)  
[→カラーチャート]

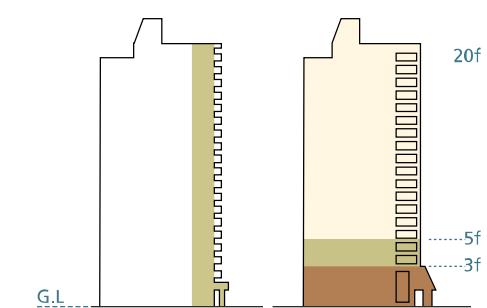


図7: 有効な配色の割合(建物側面図でのめやす)

縦方向の塗り分けは20%程度におさめる。  
階層別の塗り分けの場合、3階までは色相に変化をつけてよい。  
5階までは、塗り分けても上階層と同系でまとめるべきである。

建物の規模に適した配色がされているか?

### c. 橋梁、高架橋、歩道橋、擁壁など大規模な水平構造物の色彩景観計画

橋梁、高架橋などは街並みの雰囲気に合ったスケール感に配慮しましょう。色彩については、橋梁の下部、橋桁などは無着色のコンクリートや樹木とのバランスを考慮して配色を設定します。基準としては、やや明るめのグレー(N7)から中間のグレー(N5)にかけての中明度で彩度5以下の低彩度を使い、周りとの調和を図ります。擁壁や敷地内の人工的

な壁、防音壁、道路脇などのフェンスなどは、基本的に無彩色の「白」に近づけるか、あるいは、明度が7以上の明るさで薄い色味を使用し、周りと調和させましょう。【カラーチャート】では、上から2段目から4段目(BからD)までの範囲がふさわしいでしょう。

[→カラーチャート]

[→図9, 図10]

### d. 鉄塔、煙突など大規模な垂直構造物の色彩景観計画

周辺景観への強い影響を抑えるために、背景となる自然環境や街並みと調和させるようスケール感や色彩に配慮しましょう。

例えば、水平目線より見上げる角度で視界に入る、地面上に直接建つ構造物は、原則的に下部は中明度以上の無彩色(グレー)を中心として、周りの構造物とイメージの同化を図ります。中間部・上部はできるだけ無彩色の白に近づけるか、薄いブルーなどで一般的に多く見られる空の色と同化させて存在感を無くします。その場合、周囲の構造物等の形状と出来るだけイメージを合わせ、矩形に近づけたデザインを採用しましょう。基本的には、円筒形や四角錐などの構造物は、周りからの突起性を避けるために、周辺環境と同化させ目立たない無彩色に近い色を使います。【カラーチャート】では、上から2段目(AとB)までの範囲がふさわしいでしょう。

\*関係規定：航空法第51条及び第51条の2等(赤白表示等)

[→カラーチャート]



色と素材の特性を考慮しているか?

### f. カラーチャート、限界色票等を使ってのチェック 本キットの解説

- 本キット一式 内訳
- カラーチャート
  - 短冊チャート
  - 限界色票
  - 解説書(本書)

□ カラーチャートは【札幌の景観色70色】の一覧表で、色名・マンセル値・トーンによる分類と対応できるようになっています。

□ 短冊チャートは、カラーチャートのタテ列(色相)のグループごとに1枚の短冊にレイアウトしており、現場で色の識別をするときに利用します。

□ 限界色票は、計画中の色がガイドラインに則しているかどうかを確認するために使います。

チャートに準ずる色が選択されているか?

\*このキットは印刷による表現です。明示したマンセル値と印刷上の色には差異がありますのでご注意ください。

\*カラーチャートと限界色票については正式な色見本としてラッカ塗装による見本を用意しています。

限界色票を使ってのチェックは?

# 6

## 札幌の景観色70色・使用上の解説

カラーチャートの70色は10のタテ列、7のヨコ列でできています。タテ列は色相の列で赤系(第1列)～無彩色(第10列)まで。ヨコ列は明度9.0前後(A列)～2.0前後(G列)の列です。

この70色の各色ごとに一般的呼称を付け、それぞれに持っている色の属性や使用上の要点などを配色票で解説しています。

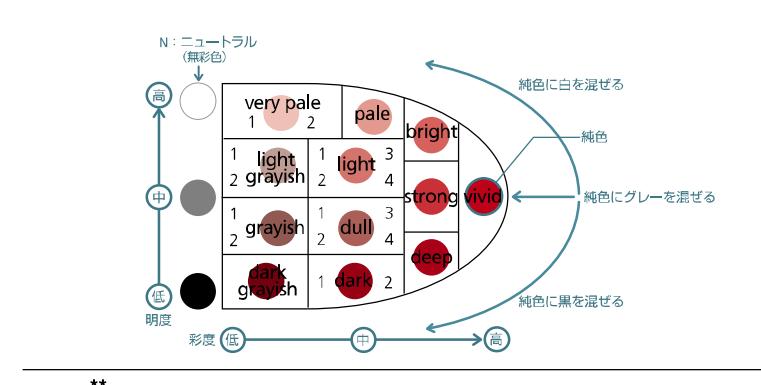
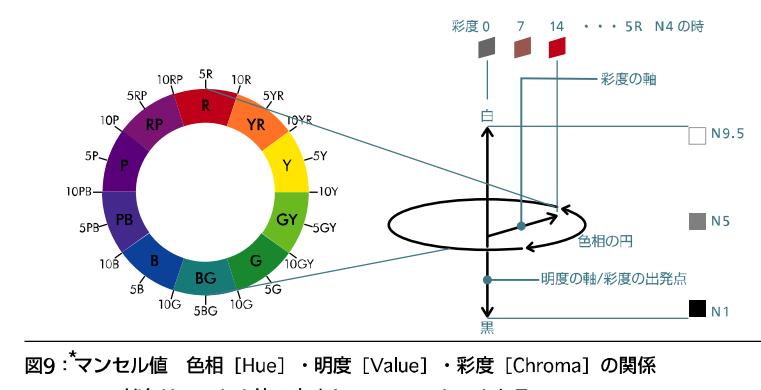
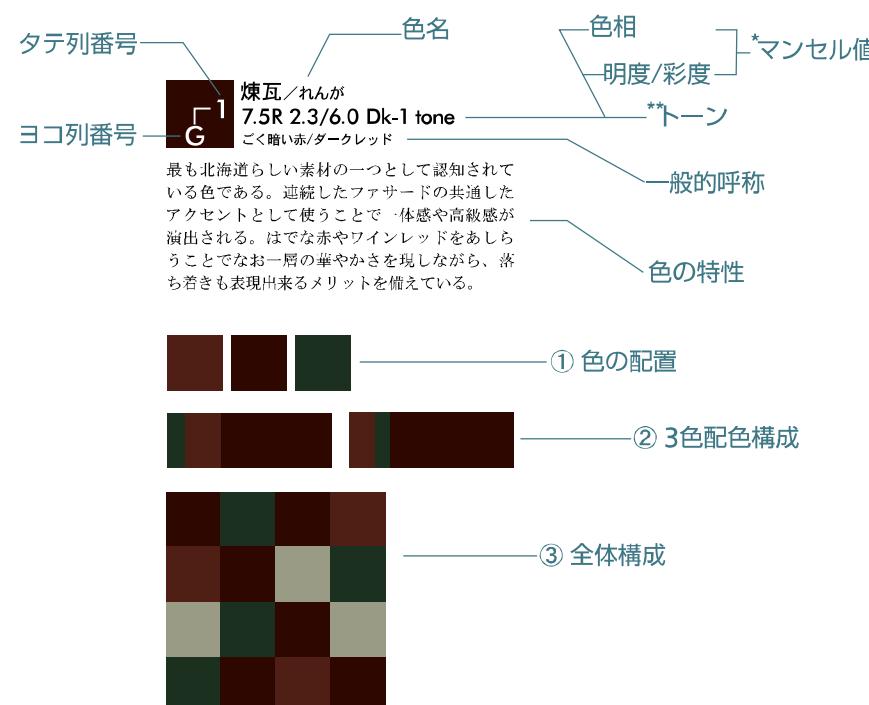
配色票では、1つの色と「グループ化された色との関係」を見ることができます。

- ① 色の配置：「両隣」を意識した配色
- ② 3色配色構成：アクセントカラーの考え方（割合・リズム・バランスなど）
- ③ 全体構成：街並みなど、より広い面積において全体に対する効果的な割合と配色

色の特性については、全体の景観色を配色構成で考えるときの参考にしてください。

\*お願い： 70色は、特色インクや特定の色材の固有色のような既製色とは対応していませんので、記載しているマンセル値を参照してください。

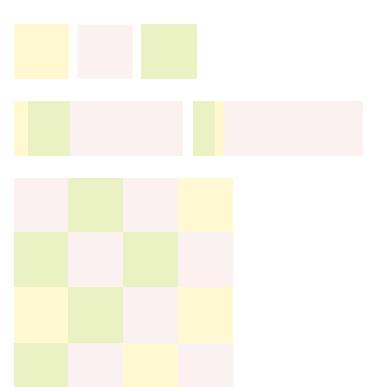
色名には市内の地名と同じものがありますが、札幌市固有のイメージカラーを意識していただくためにネーミングしたもので、その地域について特定のイメージを与えるものではありません。



## カラーエッセンス70 -配色票-

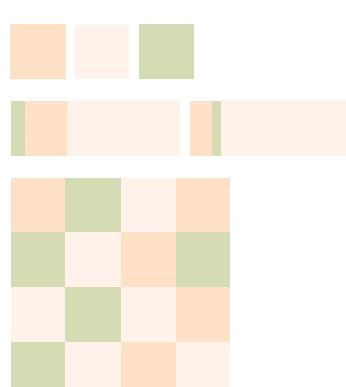
**1** 薄桜／うさくら  
A 10RP 9.0/0.8 Vp-1 tone  
ごくうすい赤/ペールピンク

この色はかなり大きな面積で単色で使用可能である。平面的な処理に加えて少し表情を変化させ、艶や光沢感を多少消すなどでデリケートな陰影がつく。周りの淡いトーンとの比較によって持ち味が広がる。春の夕暮れ時や、朝日が当たるとより一層色みが強調される。



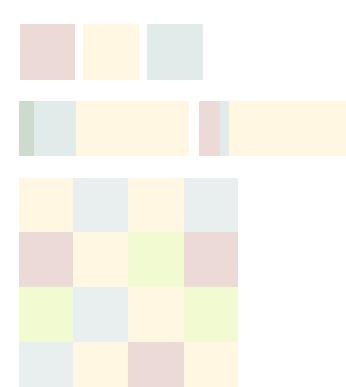
**2** 雪灯／ゆきあかり  
A 2.5YR 9.0/0.5 Vp-1 tone  
ごくうすい橙/ペールクリーム

この色はいろいろな場面に大きくも小さくも使い勝手の良い特徴を持つ。特に光沢があつてもなくそれなりに見やすくガラスやアルミなどの金属的な材料とも合わせやすい。一日中どの方位からも同じような見え方になり、陰影もデリケートにつき処理しやすい色である。茶系の濃淡や木々の緑ともマッチングしやすく自然に馴染みやすい。



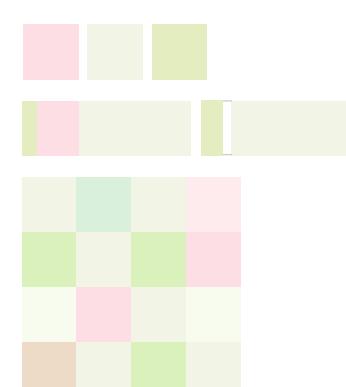
**3** 乳白／ミルキースノー  
A 10YR 9.0/0.5 Vp-1 tone  
ごくうすい霜/ペールクリーム

白に近いが白ではない。建築物に最も多く使われるアイボリーホワイトである。外装から内装、橋梁やテラスや装飾的な手すりなど大面積から小面積まで使い方が自由な特徴を持つ。材料も豊富で、柔らかい素材からかなり硬い素材まで応用範囲が広い。



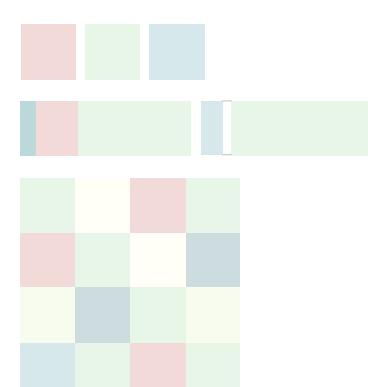
**4** 鈴蘭／すずらん  
A 5GY 9.0/0.5 Vp-1 tone  
ごくうすい黄緑/ペールグリーン

アイボリーホワイトよりも少し色みがあるが上品さや柔らかさを演出しやすい。表面の光沢感を少し減らすとさらに色の良さが現れる。くすんだピンクや黄緑とのアソートで全体をロマンティックに表現することもできる。



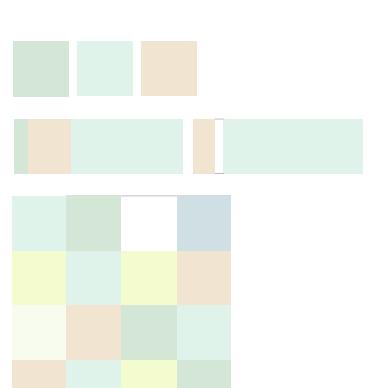
**5** 陽光白／シャイニングホワイト  
A 10G 9.0/0.8 Vp-1 tone  
ごくうすい緑/ペールグリーン

東側や北側に朝日が当たりまぶしく光る様子であり、金属質な仕上がりイメージやセラミックの表面処理がふさわしい。この色に周辺の緑を映すと落ち着いたまとまり感が出てくる。逆に夕日がまともに当たるところでは色が変化してしまい、この特徴がなかなか出しにくい。



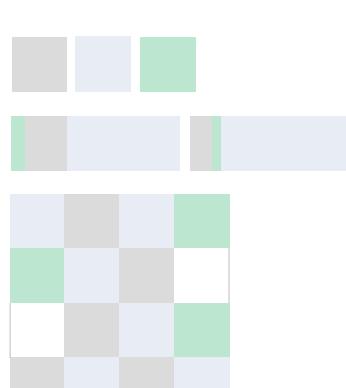
**6** 氷白／アイスグリーン  
A 5BG 8.5/1.0 Vp-1 tone  
ごくうすい青緑/ペールブルーグリーン

氷の微笑。冷たく硬いイメージであるが柔らかな曲面やガラス、透明感のある材料との組み合わせで内部の照明効果も手伝って控えめな優しさが伝わる。特に陽が短い北国の冬にすっきり見えて、夏場の緑にも爽やかな存在感を發揮する。



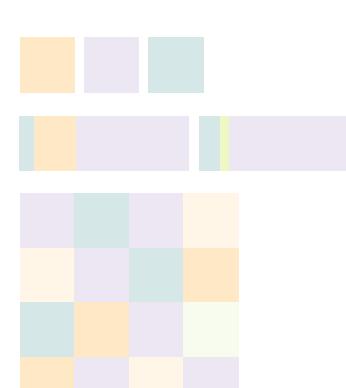
**7** 氷柱／つらら  
A 7.5PB 9.0/2.0 Vp-2 tone  
ごくうすい青紫/ペールパープルブルー

この冷たさは人面積になるとさらに強調される。全体にデザイン形状が幾基調や細い部分に使われる。金属質のグレーや濃紺と組み合わせてそれなりの力強さを構成できる。細かなピンス、トラップや全体にスモークをかけるなど表情を変えているいろいろな場所に使えるようになる。



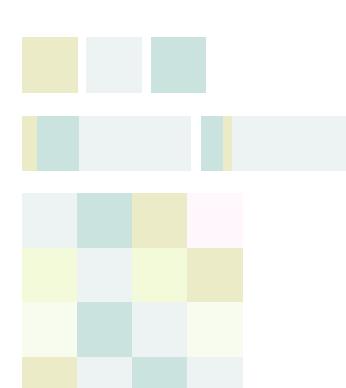
**8** 雪花／せっか  
A 2.5P 9.0/2.0 Vp-2 tone  
ごくうすい紫/ペリーベールパープル

ほんの僅か紫色がさしてある。昼間の自然光ではなくほど白に見えるが、朝夕の光では微妙な色味が演出される。表面のざらつきやバターンなどでエレガントで気品のある外観に仕上がるが、派手な色や濃いトーンを加えるなどの使い方を間違えると極端にイメージが下がってしまう。



**9** 水晶白／クリスタルホワイト  
A 10B 9.0/1.5 Vp-1 tone  
ごくうすい青/ペリーベールブルー

ほんのり青みを感じる程度のクールな白。鏡面やラスターなどとの組み合わせなど広く使われる白の範囲であり、凹凸の変化で陰影がつくとおお一層色みが強く感じられる。微妙であるがすっきりとした構造物を印象づけてくれる。



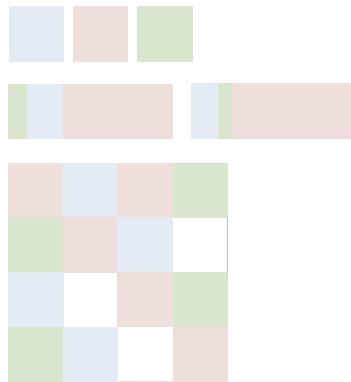
**10** 新雪／しんせつ  
A N9 N9  
白/ホワイト

これほど色として使い勝手の良い色はない。無彩色の中どこに使われても問題のない非常に便利であるが、使い過ぎると全体に薄められてしまいインパクトが弱くなる。そのためこの色にグレーを加えて多少灰色にくすませて使われることが多い。退色や汚れなどメンテナンス上の問題はあるが、この白を多様することはセンスアップさせるもっとも簡単な配色効果の一手法である。



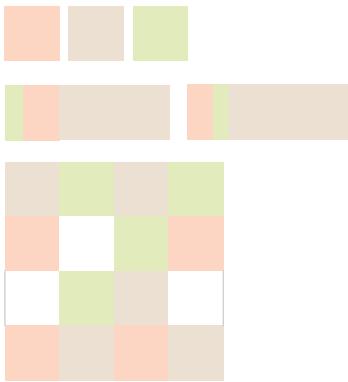
1 綿毛／わたげ  
B 5RP 8.5/0.5 Vp-1 tone  
うすい赤／ペールピンク

ほとんど白に近いピンクは優しさと柔らかさを現し、ソフトな手触り感や品質感を高める効果がある。あくまでもマット仕上げが基本であるが、ほんの少しだけ光沢を含みたり、水滴がついたりするもともと輝きを放つ色の一つである。白や明るいグレーとのコンビネーションでさらにソフト感や上品さを強調できる。



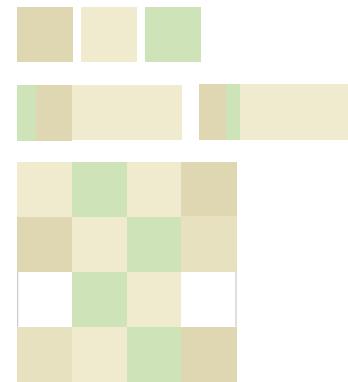
2 百合が原／ゆりがはら  
B 5YR 8.5/0.5 Vp-1 tone  
うすい橙／ペールクリーム

少し厚みや凹凸が加わることで見え方が変わると特徴を持っている。色味のあるアイボリーであり、全面的な使い方次第ではかなり落ち着いた印象を与える。少し汚れてくると味わいが出てくる色でもある。生成りにも近く、素材や生地の良さ、無垢材の持ち味を活かす色として使われる。



3 白樺／しらかば  
B 7.5Y 8.5/1.0 Vp-1 tone  
うすい黄／ペールクリーム

ノーブルなアイボリーであり、すっきりした印象を伝える色である。大面積に使うよりも大きく分割をして配色として使う方が効果的である。本部とのマッチングもしやすく、土色や煉瓦などとのバランスも取りやすい。ナチュラルイメージに仕上げるには、外せない大切な色である。

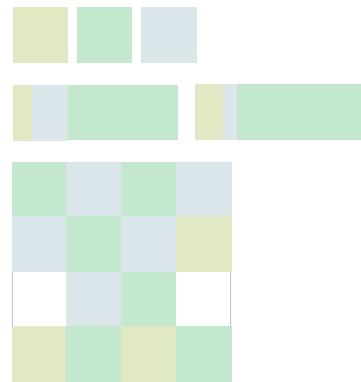


4 落の臺／ふきのとう  
B 5GY 8.5/1.5 Lgr-1 tone  
うすい黄緑／ライトグレイッシュイエローグリーン

落ち着いた上品さと素材の持ち味を大切に表現してくれる色である。夕暮れ時の光で一層陰影がついて深みが増すと美しく感じられるトーンであり、形やディテールの表現にデリケートな対応ができる。

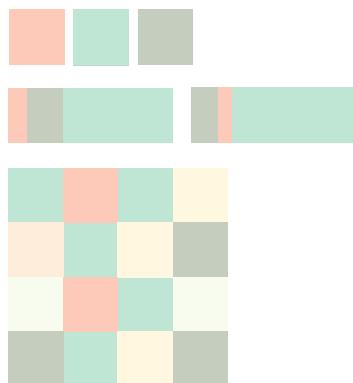
5 氷雨／ひさめ  
B 7.5G 8.0/2.0 Lgr-1 tone  
うすい緑／ライトグレイッシュグリーン

微妙すぎてかえって使いにくいかもしれない。スッキリとしたやかな構造体としての緊張感も表現しやすい色である。軽くて薄い材料の質感を的確に選ぶことが求められる。決して簡単に安い材料では仕上げない方がベターである。都会的な洗練さを上手く表現できる色として有効である。



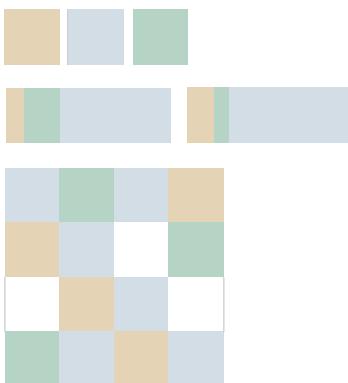
6 雪まつり／ゆきまつり  
B 5BG 8.0/2.0 Lgr-1 tone  
うすい青緑／ライトグレイッシュブルーグリーン

この色の青みは使いやすく、配色もしやすいが取り込む色によってはバランスを崩すことにもつながる。塗装でもタイルでも人工的な素材とのコンビネーションで一層すっきりとした印象に仕上がる。北国ならではの色味であり、寒色系の大面積カラーとして使いやすい。



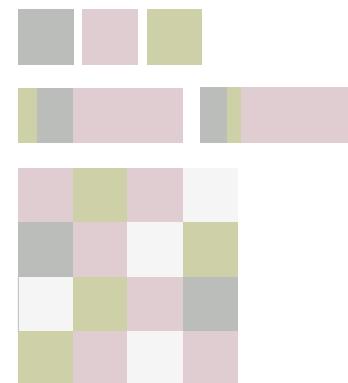
7 雪虫／ゆきむし  
B 6PB 8.5/2.0 Lgr-1 tone  
うすい青／ライトグレイッシュブルー

北国の光や季節感に対応した色のトーンであり、一瞬は暗く感じるがオールシーズンで使えるならば穏やかで落ち着いたイメージになる。仕上げ素材の耐久性や汚れ具合を想定して使い続けるとかなり風土を意識した使い方につながる。



8 リラ霞／りらかすみ  
B 5RP 8.0/1.5 Lgr-1 tone  
うすい紫／ライトグレイッシュパープル

かなり赤み、紫みを感じる色であるが大面積になるともう少し白っぽくなる。これも夕暮れや夜間照明では昼間と違った色に映る可能性がある。構造物の形状によっては、色味自体がデリケートで、ソフトイメージのために、似合う似合わないがはっきりしてくる。特にこの色は優しさと上品さを感じさせてくれる。

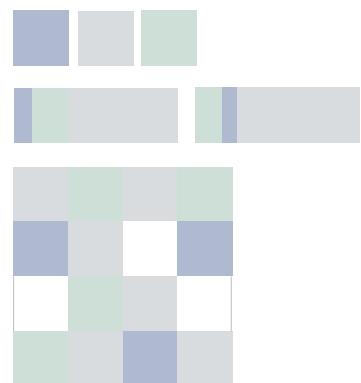


9 凍白／とうはく  
B 10B 8.0/1.5 Vp-1 tone  
うすい灰青／ペールブルーグレー

大面積には使いにくいが、部分的には大胆な使用が考えられる。夏の爽やかさもあるが雪とのマッチングも美しく、真夏の涼い緑ともバランスが取りやすい特徴をもっている。中高層部で縦長のアクセントゾーンに使える色である。

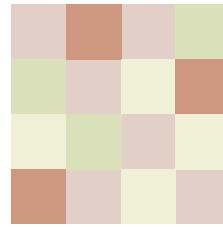
10 霧水／むひょう  
B PB N8.5  
うすい灰／ライトグレー

多くの外壁に使われているボピュラーな色であり、普通に見かけるコンクリートの色が代表しているライトグレーに、ほんの少しだけ青みが入るとすっきりして見える。少しひねりを足したことで、時間的な経過に耐えられるようなイメージになり、全体のバランスも取りやすくなる。



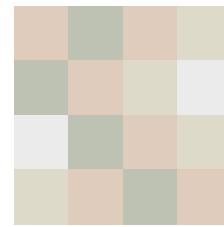
**C<sup>1</sup>** 白茶／しらぢゃ  
10R 8.0/1.0 Lgr-1 tone  
明るい赤/ライトグレイッシュブラウン

これは一般的な赤みのベージュの範囲に入り、多くの場面で最も使いやすい色の一つである。樹木の幹や煉瓦、土や砂などの天然素材とのマッチングに優れている。馴染みやすく自然に溶け込み、それなりの色味として主張もする魅力的な色である。



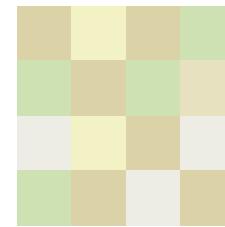
**C<sup>2</sup>** 雪消水／ゆきげみず  
7.5YR 7.5/1.0 Lgr-1 tone  
明るい橙/ライトグレイッシュベージュ

この色も一応ウォームベージュの仲間であるが、荒々しく太い木材などと組み合わせられたり、少しくすんだイメージで素焼きのタイルやマットな仕上げが似合う色である。複雑な形状や凹凸に光が当たることで変化を表現しやすい色である。鉄や石等を背景として支えるのに有効な色の一つである。



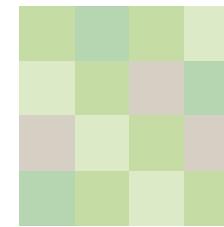
**C<sup>3</sup>** 札幌玉葱／さっぽろたまねぎ  
5Y 8.0/2.0 Lgr-1 tone  
明るい黄/ライトグレイッシュイエロー

クールベージュで生地のままをイメージする色であり、自然の濃淡を感じさせる。砂岩や自然石に多く建築素材としてはポピュラーな色である。バリの古い街並みを構成している建造物に多く見かけられる石の色もある。



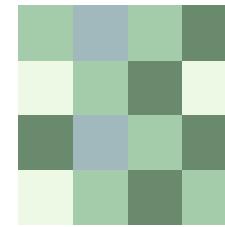
**C<sup>4</sup>** キャベツ／キャベツ  
5GY 8.0/2.0 Lgr-1 tone  
明るい黄緑/ライトグレイッシュイエローグリーン

かなり不思議な色で日本の大規模建造物にはあまり見かけない。街中のアクセント的な場所やシンボル的なゾーンで展開されると効果的である。また、郊外の林や森を背景とする構造物にはそのまま使えるが、仕上げの質感を高めることが必要となる。



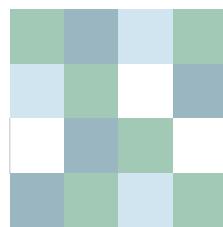
**C<sup>5</sup>** 創成柳／そうせいやなぎ  
5G 7.0/2.0 Lgr-2 tone  
明るい緑/ライトグレイッシュグリーン

日本の伝統的な色の一つである。中低層部分に大きめのスペースで高級な材料でアクセント的な配色を使うと一層効果的に見せられる。雪国のピンク肌にもマッチングするが、多少日陰や地味な場所が向いている。あまり明るすぎる場所ではこの色の良さが發揮しにくいと思われる。



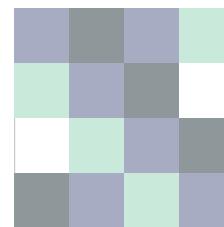
**C<sup>6</sup>** 樹木／じゅひょう  
5BG 7.0/2.0 Lgr-2 tone  
明るい青緑/ライトグレイッシュブルーグリーン

人工的な色を感じさせてくれる。プラスティックやアクリル、ガラスなどの透明感や透ける素材加工などを組み合わせるとよりモダンさが表現できる。すっきりとした軽さで全体の構造を見せるには最適である。



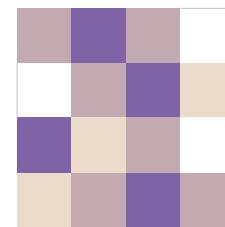
**C<sup>7</sup>** 雪影／ゆきかげ  
6PB 7.0/2.0 Lgr-1 tone  
明るい青/ライトグレイッシュブルー

構造体で黒や紺等の縁取りで使われることが多い。陰影がつくとさらに暗いブルーとなり存在感が増していく。これも北国の環境では、特にすっきりとしたイメージになりどの季節にも対応する便利な特徴を持っている。



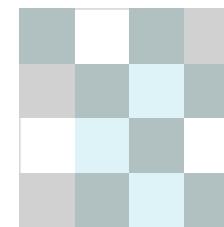
**C<sup>8</sup>** ライラック／らいらっく  
5RP 7.0/2.0 Lgr-2 tone  
明るい紫/ライトグレイッシュパープル

この色一色で全体を配色するにはかなり勇気が必要かもしれない。ソフトでデリケートなイメージで、構造体として配色全体の弱さを感じてしまうかもしれない。より効果を高めるには、白やグレーを加えて全体を上品に仕上げる配色センスが求められる。



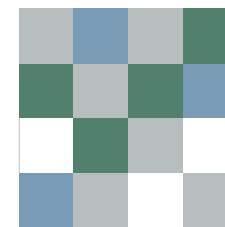
**C<sup>9</sup>** 薄水／うすこおり  
2.5B 7.0/2.0 Lgr-2 tone  
明るい灰青/ライトグレイッシュグレーブルー

大面積になると青みが感じられるようになるが、それほど何処にでも使える色ではない。白やグレー以外に濃紺や黒を効かせることでメリハリのついた緊張感のある構成にも仕上がる。



**C<sup>10</sup>** 銀鱗／ぎんりん  
PB N7.5  
明るい灰/ライトグレー

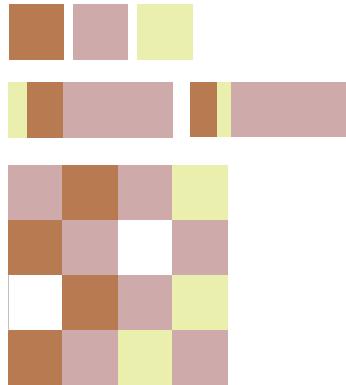
じっくりと落ちていたイメージを演出するには最適な色である。材料の重さや手触り感、凹凸感等が加わって、さらに陰影がついた状態で初めてこの色の良さが伝わる。表面の微妙な変化で見え方が変っていくが、あまり細かな変化は似合わない。早春や晩秋の寂しい季節にも、しっかりと存在感を示してくれる。



\*この資料は印刷による表現であり実際のマンセル値とは異なりますので、正確には塗装見本を参考してください。

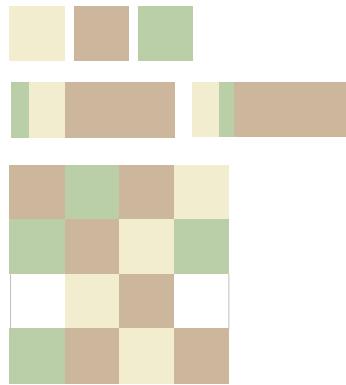
**1** カフェオーレ／かふえおーれ  
D 10R 7.0/1.5 Lgr-2 tone  
くすんだ赤/ライトグレイッシュブラウン

この色調は上そのものが乾燥した状態であり、自然の色そのものに近い。かなり長く使っていても決して飽きがこない特徴を持ち、質感や表面の微妙な変化を付けやすい色である。低層から高層までどんな素材にでも、コストに関係なく使い勝手の良い色である。



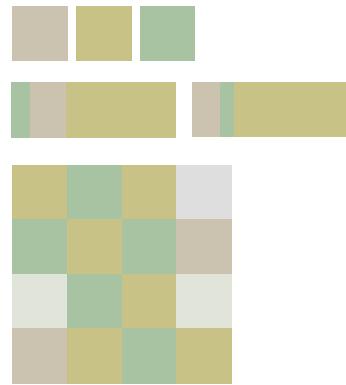
**2** ベージュ／ベージュ  
D 1Y 7.0/1.5 Lgr-2 tone  
くすんだ桜/ライトグレイッシュベージュ

オーソドックスなベージュであり、あらゆる色の背景として使われる色の代表である。周りの色と刷込みやすく街並みなどの景観構成や複合施設などの基本色として使われることが多い。上品な仕上げにもなるが、コストダウンやメンテナンスなどの条件を考慮しやすい色である。



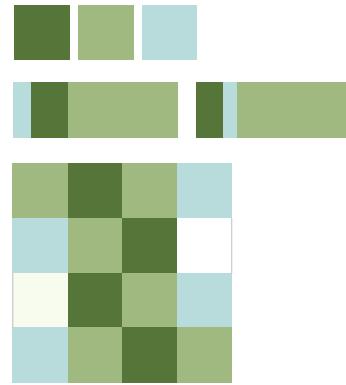
**3** 薄／すすき  
D 7.5Y 7.5/3.0 Lgr-1 tone  
くすんだ黄/ライトグレイッシュイエロー

微妙な色であり、上手に使うにはそれなりのセンスが求められる。春や秋のイメージにはしやすいが、夏の強い陽射しではそれほど綺麗に見えない。デリケートに陽射しをコントロールできる構造ならば、この色味の良さが発揮できる。艶を消した深みのある素材で仕上げることが、シンプルな形態を一層活してくれる。



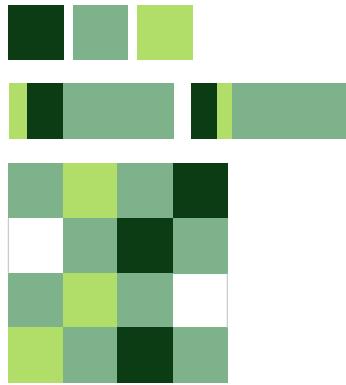
**4** 中の島／なかのしま  
D 5GY 6.5/2.0 Lgr-2 tone  
くすんだ黄緑/ライトグレイッシュイエローグリーン

落ちていた雰囲気が人の印象を与える色である。ファッショナブルなイメージと伝統的なクラシックな持ち味の両方を演出できる不思議な魅力を感じさせる色である。ベージュやグレーと配色構成されると効果的である。さらに薄いブルーなどが配置されることでさらに上品な仕上がりとなる。



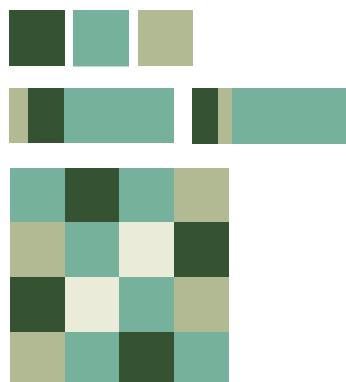
**5** 榆／えるむ  
D 2.5G 6.2/4.0 L-2 tone  
くすんだ緑/ライトグリーン

アクセント的に使われる色であるが、かなり都会では日立つ色である。自然の緑が豊かな背景ではそれほど効果がないが、ガラスやスチールなどの人工的な素材だけで構成された都市環境では、かえって優しいナチュラルな印象を与えてくれる。



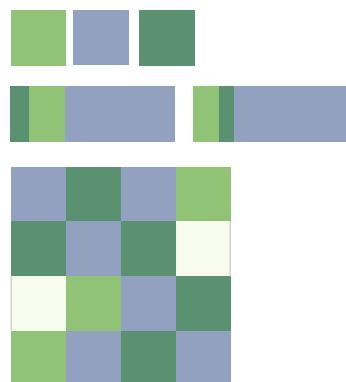
**6** 山鳴らし／やまならし  
D 5BG 6.0/4.0 L-2 tone  
くすんだ青緑/ライトブルーグリーン

深いイメージが全体に広がるようなクローズされた空間で使われることで、この色の深みのある特徴が一層活かされる。自然環境が豊かな背景ではこのくらいトーンを下げないと、自然そのものが持っている緑の美しさに負けてしまう。白やライトグレーの縁取りが加わるとすっきりとしたイメージに仕上がる。



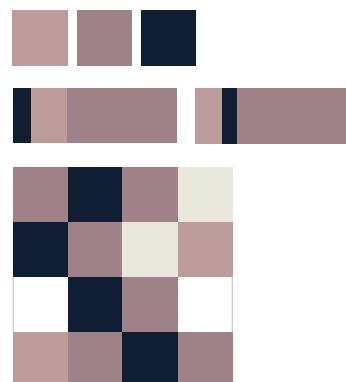
**7** 蝦夷延胡策／えぞえんごさく  
D 6PB 6.0/5.0 L-3 tone  
くすんだ青/ライトブルー

暗いブラウンやブラックなどをを使った重厚感のある構造物に対して、奥まったスペースのアクセントとする程度が素直な使い方としてふさわしいと思われる。構造物全体に使うには強すぎて使いにくいが、線約的な部分や軒裏や天井など隠れた部分には適している。



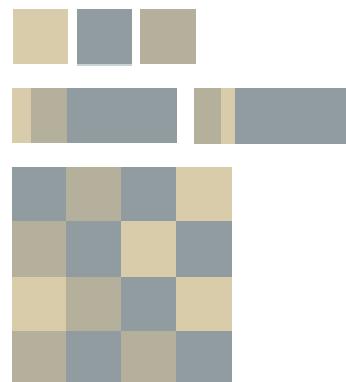
**8** 藤野／ふじの  
D 5RP 6.0/2.0 Gr-1 tone  
くすんだ紫/グレイッシュパープル

くすんではいるがそれでも色味があり、かなり大面積には使いにくい色である。基本的にグレイッシュピンクは綺麗に見えるがそれなりに彩度を押さえて使うことが大切である。紺色やダークな灰色等の多少暗めのアクセントを加えて、全体を引き締めるバランス効果が必要になる。



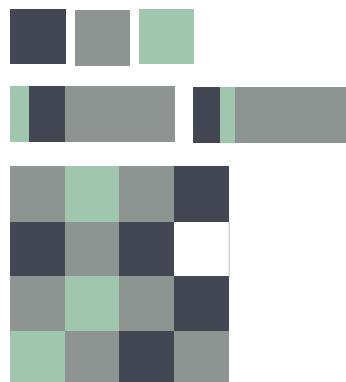
**9** 札幌軟石／さっぽろなんせき  
D 5B 6.0/1.5 Lgr-1 tone  
くすんだ灰青/ライトブルーグレー

実に高級感がある格調高いグレーである。ちょっとした青みがその材料の深みや重さを感じさせ、配色バランスも取りやすいためにどんな形態の構造物にも向いている。秋から冬にかけて口が短くなるとなお一層この色の良さが伝わりやすい。



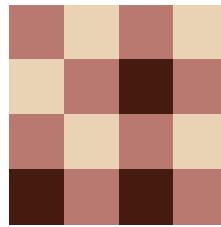
**10** 吹雪／ぶりざーど  
D PB N6.5  
くすんだ灰/メディアムダークグレー

公共の大規模な施設や構造物で、周りにとけ込ませるために効果がある色である。煙突や鉄塔、橋梁や橋桁、ガードレール、照明灯など存在はしてもそれほど強調して見せなくてもすむ物に適している。空に自然と馴染んで消えて見える現象もカラーコントロールとして有効な手段である。



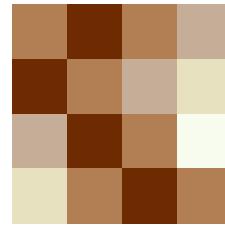
「E」  
ミルク金時／みるくきんとき  
10R 5.7/4.0 L-2 tone  
濃い赤／ライトレッド

赤色は土であり皮であり樹木の幹の色である。赤みのあるこの茶色は、赤い煉瓦色を薄めた色であり、濃い茶やグリーンとマッチングしやすい。ヨーロッパ風の伝統的なイメージや秋の落ち着いた感じを演出しやすい色である。



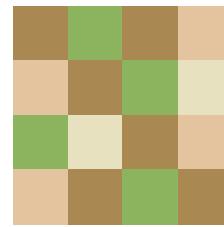
「E」  
蝦夷りす／えぞりす  
5YR 5.7/4.0 L-2 tone  
くすんだうす橙／ライトレッドベージュ

秋の完全に脱色された落ち葉色であり、つや消しの落ち着いた秀逸気をもつていて。特に石や使い素材で表現しやすく、重厚感や格調といったイメージを構成しやすい特徴がある。砂色であり、木部やタイルなどの異素材でもコーディネートがしやすい色である。



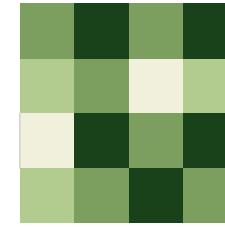
「E」  
馬鈴薯／ばれいしょ  
2.5Y 5.7/4.0 L-2 tone  
くすんだ黄／ライトイエローベージュ

このトーンのものつ上品なくすみが手触りや質感を高める効果をもたらす。中間的な明度彩度が、全体の調和を取りやすくしている。肌色や木材ともマッチングしやすく使われる用途も広い。



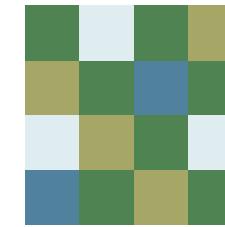
「E」  
羊ヶ丘／ひつじがおか  
7.5GY 5.7/4.0 L-2 tone  
くすんだ黄緑／ライトイエローグリーン

くすんだこのグリーンは、丁度葉の裏側の色に似ている。構造物と背景の植物との対比で同調させる効果を持っている。背景と上手く溶け込んで存在感をアピールできる微妙な色である。夏の木々が生い茂った状況から、真冬の枯れ枝だけになつた風景までかなり年間を通じて使える色であるが、大規模構造物全体を単色としては使いにくい。



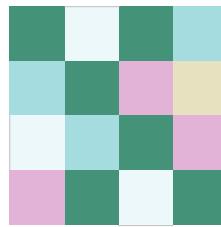
「E」  
モエレ沼／もえれぬま  
10GY 5.0/4.5 Dl-1 tone  
くすんだ黄緑／ダルイエローグリーン

夏、ゆっくりと流れれる川の水の色である。ちょっとくすんでいるが白をアクセントとして使うことですっきりとしたイメージを構成できる。北国らしい爽やかさと落ち着きの両方を感じさせる色である。



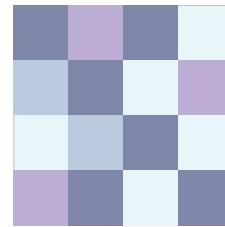
「E」  
オーロラ／おーるら  
5BG 4.3/4.0 L-2 tone  
くすんだ青緑／ライトブルーグリーン

かなり珍しい色相であり、使うには高度なセンスが必要とされる。日本ではここ北海道でしか使えないような色であるが、紺色やダークグレー、そして白を加えてエキゾチックなイメージを表現できる。



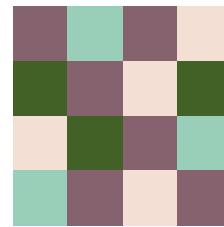
「E」  
ラベンダー／らべんだー  
6PB 5.5/3.0 L-2 tone  
くすんだ青紫／ライトパープルブルー

空の色であり、そのまま使うと空と同化して消えるような効果が期待できる。この少しきくすみが配色バランスを取りやすく、塗装でもタイルでも仕上げ素材に関係なくイメージとして使いやすい色である。陰影や凹凸が加わることで、よりシャープさが演出できる。



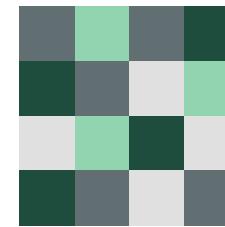
「E」  
雁金草／かりがねそう  
7.5RP 4.5/2.0 Gr-2 tone  
くすんだ赤紫／グレイッシュパープル

穏やかな和風イメージも感じさせるが、反対に高貴な洋風のイメージも深させてくれる不思議な色である。緑と組み合わせることで繊細さを表現できる。ラスターーやガラス質の外壁材で多く見かける。ラスターーやガラス質の外壁材で多く見かける。ラスターーやガラス質の外壁材で多く見かける。



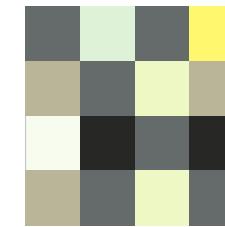
「E」  
郭公／かっこう  
5B 5.0/1.5 Gr-1 tone  
くすんだ赤紫／グレイッシュパープル

かなりしっかりととした構造体を強調できる色である。大面積には使いにくいが、縦基調のアクセントや開口部の小さな構造物には使える。グレーのトーンが汚れを目立たなくしているが、全体を引き締めて小さく見せることにも使える色である。



「E」  
蝦夷梟／えぞふくろう  
PB N5.0  
濃い灰／ダークグレー

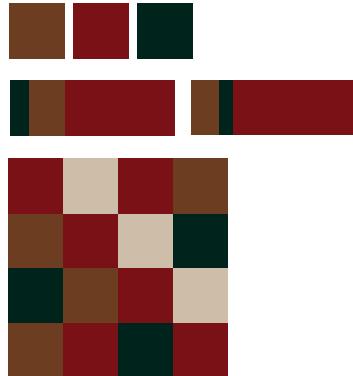
この明度では大面積には使えない。細かな細工や装飾的な部品をこの色で着彩するとほとんど存在感がなくなる効果が得られる。一般的に構造物では完全な無彩色を使うことは少なく、必ず色味が少しついていることが多い。この青みのグレーは全体の緊張感や一体感を出すには便利な色である。



\*この資料は印刷による表現であり実際のマンセル値とは異なりますので、正確には塗装見本を参考にしてください。

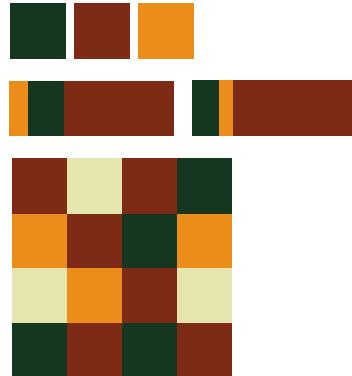
**F<sup>1</sup>** ペチカ／べちか  
7.5R 3.0/8.0 Dp-1 tone  
暗い赤/ディーブレッド

年月が経過した煉瓦の色である。しっかりととした重さを感じる色調であり、中低層部を高級イメージに仕上げるために使い勝手がいい色である。この色だけで使うよりもダークグリーンやゴールドとの組み合わせでさらに効果が高まる。



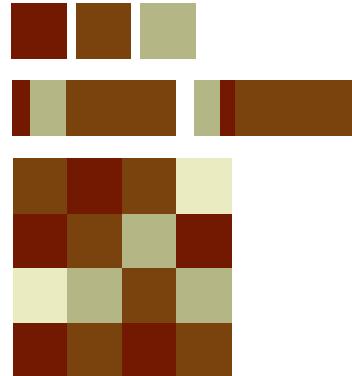
**F<sup>2</sup>** 蝦夷鹿／えぞしか  
5YR 4.0/6.0 Dl-4 tone  
暗い茶/ダルイエローブラウン

オーソドックスな茶色であり、上質な皮の色や毛並みを想像させる。ふぞろいの石積みやストレート、素焼きのタイルのイメージがあり、田舎の豊かな自然を彷彿とせる素朴な色である。黄色に寄った茶色は、陽当たりの良い南向きの構造物に適している。



**F<sup>3</sup>** ピア茶／ぴあちゃ  
7.5YR 4.0/6.0 Dl-4 tone  
暗い黄/ダルイエロー

都会的で洗練された茶色である。ざらざらした砂目や微妙な凹凸で深みがついて見える。自然の緑や焦げ茶にも馴染み、しっかりした構造と重量感を感じさせ全体のまとまりを表現できる。光沢のあるなしや金属や鉄物のアクセント効果で一層上品な配色となる。

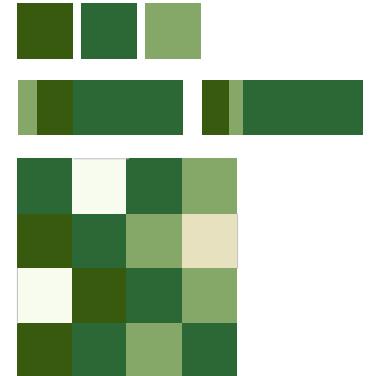


**F<sup>4</sup>** 藻岩山／もいわやま  
5GY 4.0/6.0 Dl-4 tone  
暗い黄緑/ダルイエローグリーン

普通は低層部に部分的な使い方をするが、北側や西側の壁面には大面積でも可能性がある。白とのコンビネーションを考えるといろいろな場面で使える色である。緑の濃淡で全体をまとめることで景観全体が落ち着いた印象につながる。

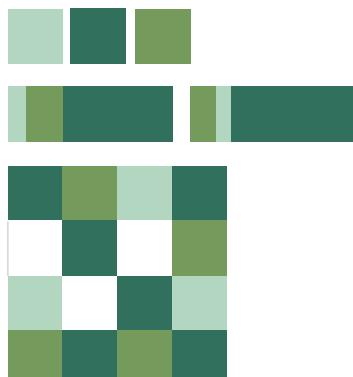
**F<sup>5</sup>** 三角山／さんかくやま  
10GY 4.0/4.0 Dl-2 tone  
暗い黄緑/ダルグリーン

春から夏にかけての緑を現している。曲線的な形態やなめらかな表面処理に向いているグリーンである。他のグリーンと同様に、配色上は必ず白を加えることでバランスが取れる。



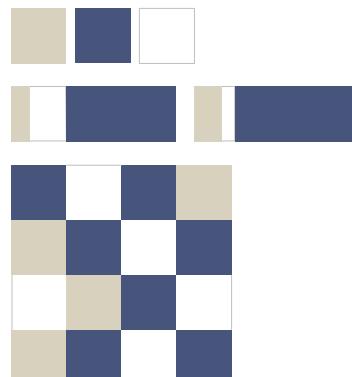
**F<sup>6</sup>** ポプラ／ぼぶら  
7.5G 4.0/4.0 DI-2 tone  
暗い緑/ダルグリーン

すっきりした洋風のグリーンである。夏の爽やかな風を感じさせるアクセントカラーの一つである。薄いブルーとのマッチングでより札幌らしさを表現する配色が作りだせる。夜間照明では特に美しく見え、落ちていた雰囲気を演出しやすい色である。



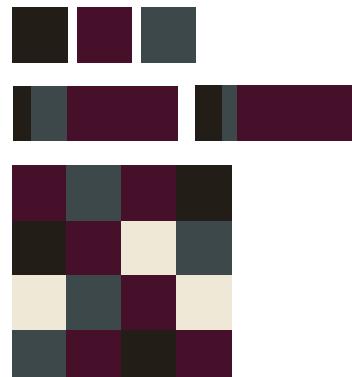
**F<sup>7</sup>** 豊平川／とよひらがわ  
5PB 4.0/3.5 Dl-2 tone  
暗い青紫/ダルブルー

かなり小さな面積で使われるアクセントカラーの一つである。白やグレー以外にも紺色や濃い紫などとの配色構成で、北国らしいイメージが表現できる。もっと寒色系の美しさを大切にしたカラーコーディネートを増やしてほしい。



**F<sup>8</sup>** 小豆／あづき  
7.5RP 2.3/4.0 Dk-1 tone  
暗い赤紫/ダーカーパープル

光沢のある石材や金属とのコンビネーションで高級感を感じさせる色である。落ち着いた大人のイメージであり、夜のライトアップでも都合的な洗練された構成を演じしやすい色である。

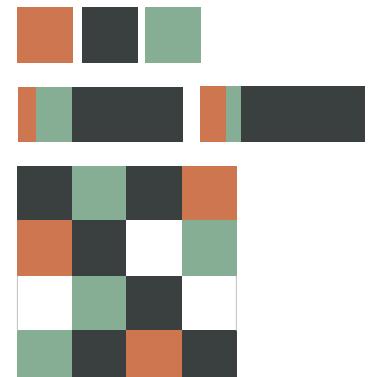


**F<sup>9</sup>** 石切山／いしきりやま  
10B 4.0/1.5 Gr-2 tone  
暗い灰青/グレイッシュブルー

低層部から床材にかけて目線より低い部分のアクセントとして有効な色である。すっきりとした公共的な施設やインフォメーションなど、それはどの強烈ではないが目立つ配色にも使える。人工的な素材で仕上げることでオールシーズンで強調される色である。

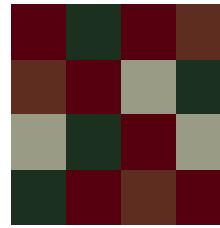
**F<sup>10</sup>** 開拓使／かいたくし  
PB N3.5  
暗い灰/ダークグレー

すっきりとした構造を主張するためには役立つ色である。どんな気象条件でも変わらない印象に維持できるトーンであるが、貞夏の陽射しにはマッチングしない。ガラスやアルミや鏡面仕上げのスチールとの組み合わせでモダンなイメージに仕上がる。



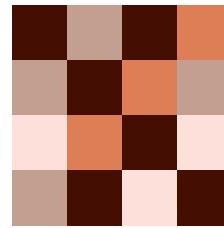
**G<sup>1</sup>** 煉瓦／れんが  
7.5R 2.3/6.0 Dk-1 tone  
ごく暗い赤/ダークレッド

最も北海道らしい素材の一つとして認知されている色である。連続したファードの共通したアクセントとして使うことで一体感や高級感が演出される。派手な赤やワインレッドをあしらうことでおなじく華やかさを現しながら、落ち着きも表現できるメリットを備えている。



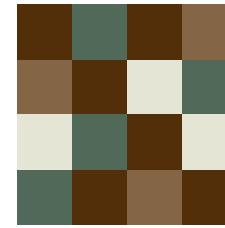
**G<sup>2</sup>** 生チョコ／なまちょこ  
2.5YR 2.3/4.0 Dk-1 tone  
ごく暗い楳/ダークブラウン

全面をこの焦げ茶で使うには暗すぎるが、同系のトーン変化でコントラストを付けると遠近感や立体感を感じさせる効果がでてくる。重量感のある材料をたっぷり使うよりも、配色で落ちていた印象に仕上げるのに役立つ色である。茶色は全般的に木部との配色性に優れている。



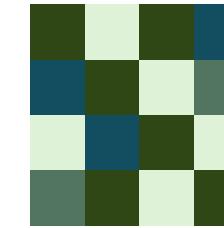
**G<sup>3</sup>** 団栗／どんぐり  
10YR 3.3/4.0 Dk-1 tone  
ごく暗い黄/ダークイエロー

同じ焦げ茶色でも多少黄色に寄っているため上品な感じに仕上がる。寒色系のアクセントと組み合わせることでさらにバランスが取れた構成になる。艶を消した仕上げやきめ細かな素材が似合う。



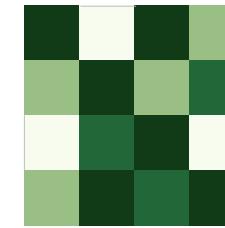
**G<sup>4</sup>** 熊笹／くまざさ  
5GY 3.3/4.0 Dk-1 tone  
ごく暗い黄緑/ダークイエローグリーン

自然の変化を背景として支える緑として一番暗いトーンであるが、白やブルーを取り込むことですっきり感が出てくる。緑を大切にするには、自動的に緑色が美しく見えるような配慮が求められる。そのためには自然の緑よりも暗いトーンが必要と思われる。



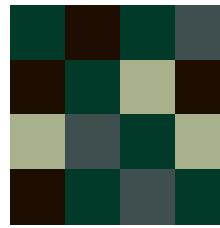
**G<sup>5</sup>** 芸術の森／げいじゅつのもり  
2.5G 2.3/4.0 Dk-1 tone  
ごく暗い緑/ダークグリーン

真夏の生い茂った樹木の影がこの深緑である。少し青みを感じる程度であるが、洋風なイメージを与えてくれる。艶を出した素材や透明感のあるガラス等とマッチングしやすい特徴を持っている。



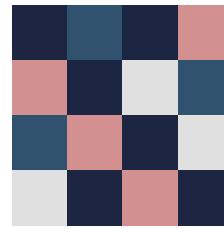
**G<sup>6</sup>** 蝦夷松／えぞまつ  
2.5BG 2.3/4.0 Dk-1 tone  
ごく暗い青緑/ダークブルーグリーン

深い陰影を強調するような緑色や見切りに使われる色であり、特に焦げ茶とのバランスが取りやすい。格調の高い品質感を感じさせる色でありながら、ソフトなイメージも感じさせるデリケートなトーンである。アクセントや部分使いにしてもかなりセンスの良さが求められる。



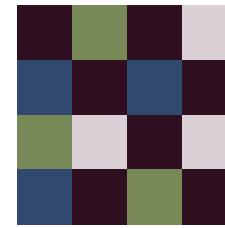
**G<sup>7</sup>** 藍の里／あいのさと  
5PB 2.3/2.5 Dgr tone  
ごく暗い青/ダークブルーグリーン

全ての色のバックグラウンドとして最も使用頻度の多い色がこの濃紺である。どんな色ともマッチングできる不思議な特徴を持ち、配色上で合わない色がないくらい便利でバランスが取りやすい基本色である。同じ基本色の白との組み合わせで使われることが多い。



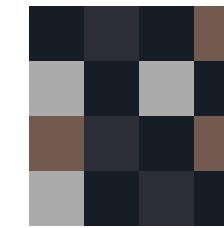
**G<sup>8</sup>** 蝦夷紫／えぞむらさき  
5RP 2.3/2.5 Dgr tone  
ごく暗い紫/ダークグレイッシュパープル

紺色と比べるとかなり特殊な色である。ファッションカラーとして扱われることも多く、ほんの一部のアクセントカラーとしての使い方がせいぜいである。夜間には多少照明効果でやわらげることも考えられる。しかし、寒色系とのコンビネーションで普通に見られる配色になる。



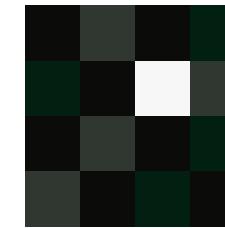
**G<sup>9</sup>** 月無夜／みどりないと  
5PB 2.0/1.5 Dgr tone  
ごく暗い灰青/ダークグレイッシュブルー

通常の濃紺よりもさらに暗いトーンである。構造物全体のイメージから消したい装飾物などに使うことができる。大きくて目立っている物を気にならないイメージにするにはグレーやこの色をミックスさせて使うことで効果が得られる。景観全体に引き締まった印象を与える色であり、濃い緑やダークなグレーと同じ機能を持っている。



**G<sup>10</sup>** 墨鳥／すみがらす  
N1.5  
黒/ブラック

完全に背景色としての役割を担う色である。白い冬には対照的に目立つ色であるが、普通は消したい部分の色として使われることが多い。配色上はどんな色にもマッチングしやすい特徴を持っている。



\*この資料は印刷による表現であり実際のマンセル値とは異なりますので、正確には塗装見本を参考してください。